

女の視点で見る農業経営

第8回

牛乳を使ったお菓子の店を出 せたらいいなあ

渡邊 浩美さん

わたなべ・ひろみ 昭和37年12月15日生まれ。酪農家の長女として生まれる。県立那須農業高校卒業後、宇都宮農業高校併設の専攻科で酪農を学ぶ。昭和62年3月、近くの牧場で研修中だった透さん（33歳）と出会い結婚。これを機に規模拡大を始め、平成7年7月、牛の個体管理システムを含むミルクングパーラーのシステムを導入。現在飼育頭数は124頭（うち搾乳牛は61頭）、3.75haの自作地で飼料を栽培。同居家族は祖父の捨次郎さん（85歳）、祖母キノさん（85歳）、父勝男さん（56歳）、母スイさん（56歳）、透さん、浩美さん、長女ゆずはちゃん（6歳）、次女葵ちゃん（1歳）の4世代8人。〒329-28 栃木県那須郡塩原町上横林319 TEL & FAX 0287-35-2543



これまでは、どちらかというところ「お嫁さん・奥さん」を紹介することが多かったこの「女の視点で見える農業経営」のページだが、今回紹介するのは栃木県那須郡塩原町の渡邊浩美さん（33歳）は、酪農家に生まれ育った「娘さん」である。

毎朝5時、昨年7月に新設したばかりの牛舎へと足を運び、夫の透さん（33歳）とともに搾乳作業に精を出している。「私は、朝は3時起きでも4時起きでもへつちやら。どんなに早くても目覚まし時計なしで起きられるんです」とニコリ。さすが学生時代から15年近く家業を手伝っていたキャリアの持ち主である。渡邊牧場の酪農は、牛舎の牛を1カ所に集め、12頭ずつ交代で搾っていくフリーストール方式。牛が搾乳所に入ると同時にセンサーが牛の登録番号を読み取り、搾乳が終わると、その牛の乳量が即座にインプリントされる。パソコンからデータを読み取れば、牛の状態が一目瞭然という最新の個体管理システムを導入している。「私は機械が苦手なので、最初は戸惑いでしたが、透さんのお陰でだいぶ慣れてきました」。夕方5時の搾乳には、学校から帰ってきた長女のゆずは（6歳）ちゃんも参加。真っ赤なツナギを着て、棒を片手に牛たちを追いつまむのが彼女の仕事。小さなゆずはちゃんは臆することなく、どんどん追い込んでいく。今から「私、大きくなったら牛飼になる」と張り切っている。これはまた、昔の浩美さん自身の姿なのかもしれない。

私が継がなくなっちゃ

透さんと浩美さん夫婦が4代目となる渡邊家は代々この地で農業を営んできた。父の勝雄さんは昭和30年代、おもな現金収入として葉タバコを栽培する他、自家飯米用の米、麦、小麦などを作っていた。当時は農耕用の馬と乳牛を2頭飼っていた。転機が訪れたのは昭和45年。国から転作奨励

金が出る一方で、那須地域全体で稲作から酪農へ切り替える新しい農業を模索する気運が高まっていたのだ。「俺自身牛が好きだったし、地域全体に盛んに牛を増やそうという意気込みがあった」と勝雄さん。そして乳牛15頭を導入。自分の牛舎で生まれた雌の子牛をそのまま育成し、頭数を徐々に増やしていくスタイル。昭和50年代半ばには、倍の32頭になっていた。

一方、長女でひとりっ子の浩美さんは、「中学生ぐらいから、お前は跡取りだと。私が継がなきゃって気持ちはその頃からありましたね」

迷わず那須農業高校（現II拓陽高校）生活科へ進学。本来なら畜産科へ進むところだが、そのクラスは全員男子だった。「頼めば入れてくれたのかなあ。今はだいぶ増えたみたいですけど」

浩美さんは高校を卒業して、宇都宮農業高校と同じ敷地内にあった「専攻科」へと進み、本格的に酪農を学ぶ。学校へは週に2日ほど通い、あとは自宅で「実習」を積んでいた。

時を同じくして、昭和55年頃から渡邊家では、浩美さんの曾祖父、祖母のキノさんが相次いで病に倒れ、一家は毎日の搾乳と看病に終われる生活に。以前のように頭数を増やしたくとも手が回らず、生まれた子牛をやむなく手放したこともあった。しばらくは32〜40頭という時期が続いたが、それを大きく変えたのは、浩美さんの結婚だった。勝雄さん曰く、「透が来てから、どんどん増えたんだ」

ともに酪農をやりたい夫求む

ここで、スパーマンのごとく登場した透さんとはいかなる人物なのか、説明しておこう。

透さんは浩美さんと同じ年で、新潟県長岡市出身。父は「石油掘り」のサラリーマンで、その3男坊である。根っから動物が好きなおとこ、「俺



12頭の牛が回転するミルクパーラーシステム

生の空きのある牧場があったのだ。「3年ぐらいはいるつもりなので、その間にどこか婿に入れる牧場があったら紹介してほしい。もしなかったら俺はまたどこかへ行くよ」というのが、その時の条件だったという。

一方、当時家の仕事を手伝いながら、花嫁修行していた浩美さんサイドも、事あるごとに「いい婿さんになる人がいたら、ぜひ紹介してほしい」と、言っていたという。第一条件はもちろん「一緒に酪農をやってくれる人」。

そんな2人の間を、牧場に入りにしていた牛の仲買人が取り持ってくれた。出会って半年後に結婚。こうして、那須には縁もゆかりもなかった透さんが、生涯の伴侶と自分の力をフルに生かせる場所を見つけたのである。「俺の人生行き当たりばったり。たまたま那須に来て、たまたま牧場の看板見て、たまたま研修する牧場があって、たまたま浩美と出会った」

偶然に偶然が重なっただけと語る透さんだが、本人の「酪農をやるんだ」という覚悟と強い信念がなければ、こんなに「たまたま」が続く筈はないだろう。2人の馴れ初めに関して家族は、父「やっぱり出会いだよな」浩美「赤い糸で結ばれていたから？」透「糸じゃねえ。赤い1000ミリぐらいのワイヤーで、こっちへ来い」ってギリギリ引っ張られていたのかも……一同ハハハハ(爆笑)

4世代8人家族、渡邊家の団欒は、いつもこんな風にくっつくがなく笑いが絶えない。「1000ミリの赤いワイヤー」という表現は、少々オーバーだとしても、浩美さんの「絶対いっしょに酪農のできる人と……」という思いが強かったのは確かだ。透さんの婿入りは、なだめてすかして養子を迎えるケースとはぜんぜん違う。なんといつてもやってきたその日から「即戦力」なのだ。頼もしい婿を迎えて、次第に頭数も増やしていった。

透さんが来て変わったのは、牛の数はかりではない。まずは牛の出産。

「以前は子牛の足が見えたら、人間が引っ張って手伝っていました。でも、透さんが来てから牛に自然に産ませるようになったんです」と浩美さん。このやり方だと、朝牛舎に行ってみると子牛が死んでいることもある。「人間が手伝えれば、しばらく生きたかもしれない。でも結果的にいい牛に育たない。自分でちゃんと産まれる牛だけを残せば、最終的に乳量も上がる」

と透さん。その他、それまでどちらかといえば「獣医さん任せ」だった種付も自主的に血統を選んで行なうようになったこと、飼料も成長段階に合わせて別メニューを組むことになったこと、共進会に出品して見事優秀賞を獲得する牛を育てるまでになったこと。「透さん効果」はいたる所に現れている。その最たるものが新牛舎の建設だろう。

女1人でも1カ月大丈夫

もともと、規模拡大の希望を抱いていた勝雄さん。透さんが加わったことで思い切った投資に踏み切れると決断した。前々から新システムでの牛舎新築の話はあったが、見積もりの数字を見るにつけ個人ではとても負担できない数字があがってくる。そんな時に舞い込んだのが、国の補助事業の話だ。さまざまな審査を経て、補助を受けられることになった。新築の牛舎、ミルクパーラー、自動給餌機械、建物、個体管理を含むコンピュータシステム、堆肥舎……費用の総額は1億7千万円。自己資金はその約3分の1だが、勝雄さんの熱意と、頼もしい後継者の存在があったからこそ、実現したプロジェクトだ。

新しい牛舎をめぐって、勝雄さんと透さんが喧嘩々々と相談を重ねる日が続き、完成したのは昨

の成績で入れるのは農業高校ぐらいい(本人談)だったことから、長岡農業高校へ進む。そして3年生の夏、農場実習で訪れた北海道で「酪農学園」のことを知った。

学校へ通うのは冬場だけ。3年で短大卒の資格が得られるという。透さんは夏場は江別の農場で働きながらこの学校へ通った。「当時は、北海道に骨を埋めるつもりでいたんだ」

それがどうして那須へ来ることになったのか? 4年の北海道暮らしを終えて、一時実家に戻っていた時、宇都宮に住んでいたお兄さんのところへ遊びにきた。那須高原をドライブする途中で、地域の酪農組合の牧場の看板が目に入る。何の伝もアポイントもなく、そこを訪れた透さんは、いきなり「どこか研修できるような場所があったら紹介してほしい」と頼んだ。するとちやうど研修

女の視点で見る農業経営



赤いワイヤーで結ばれた透さんと浩美さん



渡邊家のパソコンリーダー？のゆずはちゃん

年7月。牛の引っ越しは一気に行なうことになった。「忘れもしない7月10日。機械のセッティングが間に合わなくて、もうギリギリだった」。古い牛舎の搾乳機も耐用年数を過ぎて、故障続きの状態。それでもなんとか搾っていたが、「いよいよもうダメ」の限界に達していたのだ。

当日は新しい牛舎まで、隙間なくトラクタやありとあらゆる機材を並べて通路を作り、そこへ約70頭の牛を追い込んで移動させようとしたが、牛はなかなかいうことを聞いてくれない。中にはバリケードをかくぐぐって逃げ出し、川へ落ちてしまふものも……。その日は機械メーカーの人たちが手伝いに来てくれていたので、なんとか救出することができた。

そうしてやっと牛舎へ入れたものの、搾乳方法がこれまでと違うので、これまた牛たちがいうことをきかない。前脚を突っ張って搾乳場へ入らないものもいて、4〜5人がかりで押さなければならなかった。人間も大変だが牛も大変である。環境が変わったために精神的に不安定になり、丸2日間、夜通し鳴きつづけたという。

さて、その時浩美さんは？「私は家で寝ていたんです」

それもそのはず、浩美さんは6月22日に次女の葵ちゃんを出産したばかり。とても牛の引っ越しを手伝える状態ではなかった。乳搾りに復帰したのは新しい方式に牛たちが慣れ、乳量が安定してきた昨年未頃からだ。「妊娠中だったこともあって建築中の牛舎もあまり見にいかなかったし、機械は苦手だし、みんなお父さんと透さんに任せっきりで……。私はちっともバリバリの経営者じゃない」と恐縮気味の浩美さんだが、透さんがこのシステムを考案するとき、大きな基準となったのは「女房一人でも1カ月は大丈夫」なことだったという。飼料や水は、あらかじめセッティングしておけば自動的に出てくる。ふだんは2人で行っている搾乳作業も、時間はかかるが1人でも大丈夫。牛の状態や乳量、帳簿づけはパソコンで楽になった。何かの事情で勝雄さんと透さんが数日家を開けたとしても、家事や育児をこなしながら、浩美さん一人でも十分対応できる。「バリバリ」じゃないけどもそこまでのシステムを作ろうと思えば、今はできる時代なのだから、作ってしまったのだ。ただし問題が残っていないわけではない。新システムを導入したために、労力が格段に少なくなってしまうかわりに設備償却コストは俄然増える。

北海道で透さんが体験した酪農が飼料の大半を自給していたのに比べ、那須の酪農は土地が少ない分、購入飼料の割合がどうしても高くなる。「那須の酪農はラクだよ。北海道じゃ、夏場は乳を搾って牧草刈って、夕方搾ってまた畑に出る。睡眠時間が3〜4時間だった。自給飼料が少ない分、労力を牛に注げる」

渡邊家の場合、購入飼料は約9割。経営的に軌道に乗せるには、まだまだ頭数と1頭当たりの乳量

を増やしていかなければならない。目下、「あと20頭。1日2tが目標。あと3年でそこまで持つていかないと。今が正念場だ」(勝雄さん)。「1回に50t出す牛もいれば、20tに満たないものもある。いい牛増やして安定させたい」(透さん)、「いつか、小さくていいから牛乳を使ったお菓子のお店を出せたらいいなあ」(浩美さん)と、それぞれの夢を語る。個体管理システムが入ったので、平均の入乳水準を上げていくのも容易になる。那須は首都圏から押し寄せる観光客が多い土地柄。浩美さんの夢も商業的にも十分成功する見通しはある。それぞれの夢を抱いて、一致団結。この「正念場」をみんなで協力して切り抜いていこうという思いは一緒だ。

さて、浩美さんと透さんに別々の質問を投げかけてみた。浩美さんには「酪農以外の仕事をしてみようと思ったことはないのか?」。答えは「ない」。透さんには「もし、全国の牧場を転々としても、思うような所が見つからなかったらどうしたか」。酪農が無理なら、独立開業して商売でも始めたと思う。そしてその理由は「人に使われるのではなく、自分で何かをやりたい。やればやっただけ得るものがある」という意見は一致していた。浩美さんは、賢明に酪農を続ける両親の姿から、透さんは自分から飛び込んだ農場で実地の酪農に触れるうちに、そんな思いを獲得したのだろう。

「オヤジや浩美にも、早くコンピュータの操作を覚えて欲しいんだけどなあ……もしかすると、娘のゆずはの方が早いかも」と、透さん。そんな2人を両親に持つ長女のゆずはちゃんは、まだ小学校1年生。今はパソコンの画面を前にしてゲームやワープロに興じているが、その端末の向こう側には「女一人でも1カ月大丈夫」なシステムが繋がっている。一家の期待に、十分応えてくれるような気配だ。

(取材・文/三好かやの)